

故鬼塚光政教授への追悼の辞

経営学研究科長 片 岡 信 之

畏友鬼塚光政教授は、忽然として逝ってしまわれた。入院後にお見舞いに訪れたときには比較のお元気であったし、その後の経過も悪くないように聞いていただけに、奥様からの電話に絶句し、啞然とした思いに駆られたのであった。

教授は、高校時代に深刻な心臓疾患を患われたが、奇跡的な手術で一命を取り留められ、その後もケアを続けながら今日にいたっておられた、と聞いていた。「手術後の人生は神から貰ったようなもので、いつ死んでもおかしくなかったんですよ。もう2年も持つかなあ………」と漏らされたり、「もうシンドクなってきたから、早期退職をしようかと思っているんですよ」と、弱気の言葉を、二人だけのときには、時々お聞きしたことがある。その都度私は「鬼塚先生、まだお元気ではないですか。私をここに呼んでおいて、サッサと辞めては駄目ですよ」とお答えしてきた。励ましのつもりだったが、本当に苦しかったのではないかと、心の片隅で後悔の念に駆られている。

私が誤解したほどに、校務の世界では、先生は精力的に活躍された。学部長、研究科長、総合研究所の共同研究プロジェクトの責任者など、リーダーとして先頭に立たれた。また、教育面では、特に大学院教育に於いて、創設後間もない経営学研究科に来る院生を、人一倍熱心に指導された。留学生に対しては、研究内容指導はもちろんのこと、日本語の用語法に至るまで、懇切丁寧に指導されていたのが印象的であった。留学生の保証人引き受け、調査先企業の斡旋、生活指導、ときには就職斡旋に至るまで、懇切丁寧な面倒見のよい先生であった。そんな教授を慕って、研究室は常に大勢の大学院生

で溢れていた。実務の世界とのパイプの太さは圧巻で、実務家をお招きしてカリキュラム編成をする場合の交渉窓口は専ら鬼塚教授に頼り切っていた。学部全体が教授に甘えていたと言ってもよいだろう。

誰も分かってくれない苦しい身体条件をかかえ、短い先行きを自分では悟った上で、教授流の壮絶な生き方という美学を最後まで貫徹されたのではないかと思われる。安逸な日常性にどっぷりと埋没しがちな我々に、鬼塚教授は死してなお「毎日を限界一杯まで生きているか」と、厳しく問いかけておられるように思えてならない。

個人的な思い出として、忘れられないことは尽きないが、3つだけ紹介する。

その1。教授との直接的面識を得たのは、伊藤淳巳教授・植村省三教授（ともに元大阪市立大学教授かつ本学教授）を中心にした研究会に誘われて出席するようになってからだと記憶する。思えば長い付き合いである。ついでにということで、誘われてメンバーの重なる伊藤教授のゼミ同窓会「経友会」会員にもして貰った。鬼塚教授も私とともに大阪市立大学出身でなかった。「会友」の位置づけであった。しかし、後に伊藤教授が逝去されたとき、弔辞を読まれたのは鬼塚教授であった。どれだけグループ内で信頼され、存在感があったかを示す事例である。伊藤教授に対する尊敬の念が強く、感極まって弔辞が涙声になっていたのが記憶に残っている。

その2。知り合いになって間もない頃、「桃山学院大学で経営学研究科を創設する企画があり、教授会で賛否両論があるし、よく分からないこともあるので、片岡が龍谷大学で研究科を設置した経験を教授会で話してくれ」という依頼が鬼塚教授を通じてあった。それを皮切りに桃山学院大学と関係が深まり、設置実務上の相談にのったり村田晴夫教授（のちに学長）を設置に不可欠な人として紹介したりした。のちに博士後期課程設置時には結局私自身が桃山学院大学に移籍することにまでなったのであるが、その間、実に頻繁な情報交換をした。その際に中継基地的役割を教授は精力的に果たされたのが、いまでも印象深く、かつ懐かしく私の記憶に残っている。経営学研究

科は、鬼塚教授のこの努力なしには、設置認可が何年か遅れていたであろう。この過程で強く感じたのは、教授が実に細やかな心遣いの人であるということであった。

その3。2005年3月30日、鬼塚教授は大連市内の「21世紀ホテル」で「トヨタ生産方式の特徴と構造」についての講演をされた。大連市企業連合会・大連軽工業学院の共同主催であった。大好評で、企業から200余名、大学生も多数で、広い会場でも立ち見の出る状況であった。熱心な質問が続出した。私も同道し、同じ席で「現代日本企業における人的資源管理の新動向」と題する講演をして露払い役を務めたが、多分鬼塚教授のような迫力はなかったであろう。その前日、大連軽工業学院で余加祐学長から鬼塚教授に同校客座教授称号の授与式があり、少し前の機会に第1号となっていた私と並んで第2号の同校客座教授となられたのである。

こうして、いま思えば、教授とは短いようで長い弥次喜多道中の楽しい道程を歩ませて貰ったように思う。感謝のほかない。

教授は寡作であったが、確実にしっかりとした研究をしておられた。たとえば日本生産管理学会編『生産管理ハンドブック』（日刊工業新聞社、1999年）第7編「生産管理史」を教授は分担執筆されているが、その叙述は簡にして要を得ている見本のような文章になっている。コンパクトに詰まった内容は要約しようがないくらいに練り上げられており、内容的には18世紀後半の産業革命期から現在に至るまでの生産管理の発展史が、機械組み立て産業を中心にして、近代生産管理の萌芽（ワット、ボウルトン、バベッジなど）、形成（内部請負制、A S M E、タウン、ハルシー、ローワン、成り行き管理、テイラー、科学的管理法、ギルブレス夫妻、ガントなど）、確立（フォード、同時管理、シューハート、統計的品質管理、シューハート、デミング、ジュラン、ファイゲンバウム、PTS法、メイナード、メソッド・エンジニアリング、モーゲンセン、ワーク・シンプリフィケーション、システム工学、O R、エンジニアリング・エコノミー、価値分析／価値工学、P E R T／C P M、ワーク・デザイン、労働疎外・生産硬直化・環境汚染）、展開（リーン生産、トヨタ生産方式、F A、C I M、T Q C、ジャスト・イン・

タイム、FMS、FMC、VAD／CAM、MRP、BOM、MPS、CRP、MRPⅡ、エキスパート・システム）の過程として叙述され、それぞれの生成背景、特徴、代表的な技法、意義と限界などとして、言及されている（キーワードは論述登場順）。また、現代生産管理の主要課題として①生産システムのグローバル化、②生産システムの知能化、③品質管理の国際化への対応、④地球環境への対応等、適切な指摘をしてあり、教授の研究水準の高さを示している。

もし健康が許したならば、これらの研究成果と学識を多くの著書や論文として公表されて注目を集めたであろうと思うと、残念でならない。私の薦めを容れて博士論文に纏めようというお気持ちになっておられただけに、この点は心残りであっただろう。

幽明を異にするいまとなつては、以上の事実を伝えることを通じて亡き鬼塚教授の、誠実で愛された人となりを知って貰うことしかない。

鬼塚教授の霊が安らかに眠って戴くことを祈念しつつ搁筆する。